

18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、社会も音楽も大きく変わった頃、W.A.モーツァルトや F.シューベルトといった作曲家がウィーンで大いに活躍した。かの地は今もなお「音楽の都」である。この二人の天才は違いも大きい、「歌」にあふれた旋律をベースに流麗で活気ある音楽を作り上げた点など、通じるところも多い。ムーティが指揮するにはぴったりの作曲家であり、だからこそマエストロはウィーン・フィルでもこれらの作品をしばしば取り上げている。

### モーツァルト：交響曲 第 39 番

モーツァルトは 1788 年頃、生涯最後の三つの交響曲をわずか数週間で作曲した。演奏目的は不明であるが、質・規模ともに群を抜く 3 曲をこれだけの短期間で作曲するとは、その創造力たるや恐るべし。

第 39 番の「変ホ長調」という調性は《魔笛》と同じ。あの奇跡的至純を達成したオペラの雰囲気、ここにも横溢している。とりわけモーツァルトが愛したクラリネットの使用が、全体にふくよかさをもたらしている。

第 1 楽章は厳かな序奏から、虹のような旋律とともに晴れやかなアレグロに突入し、対位的な書法を交えて変化に富んだ展開を見せる。第 2 楽章は優雅なアンダンテ。続く愉しげなメヌエット楽章の中間部では、クラリネットが素朴な旋律を奏でる。フィナーレは無窮動風のソナタ形式で、たくましく活発に曲が締めくくられる。

### シューベルト：交響曲 第 8 番《未完成》

シューベルトの楽曲の中でも特に有名な 1 曲（シューベルト新全集では「第 7 番」となっている）。この曲に限らず、ピアノ・ソナタなどでも“未完成”が多いシューベルトだが、大地の底から楽想が湧き出るようにペンを走らせた天才にとって、その勢いこそが全体を統合・完結させることを阻んだのかもしれない。

1822 年に作曲を始めた（らしい）本作は、恐ろしいほど透徹した美しさ、深い抒情を湛えた二つの楽章をもって“完成”している、と思わざるを得ないのも事実。そこには新しい装いをまとった古典的佇まいがある。

両楽章とも 3 拍子で書かれている。低弦によって呟くように始まる序奏はその後、何度か現れるが、それによって第 1 楽章は不穏な空気を醸す。木管による第 1 主題に続く、弦楽器群によって低音から高音に引き継がれる第 2 主題の何たる美しさ！しかしこれも突然の休符によって断ち切られる。シューベルトは、ブルックナーの交響曲を先取りしたような休符を使うことが多いが、それが“歌う”音楽の美しさに、死の想念にも似た影を落とす。

第 2 楽章の不思議な転調を伴う天国的な音楽のなかにも、ドラマティックなパトスが顔をのぞかせる。あたかも終わりを告げるのをためらうかのように、美しい旋律が幾度も繰り返され、静かに曲が閉じられる。

### シューベルト：イタリア風序曲 D591

この曲を初めて聴いて、シューベルトの音楽とわかる人がどれくらいいるだろうか。たいていは「ロッシェニの曲？」と思うのではあるまいか。19 世紀初頭のウィーンでは、イタリアの作曲家ロッシェニの旋風が吹き荒れ、そのオペラに老いも若きも夢中だった。

シューベルトも例外ではなかったであろう。この序曲も、たっぷりした序奏から活気あるアレグロまで、まさに“コン・ブリオ”たること、ロッシェニの音楽そのものである。木管楽器のソロの輝きはもちろん、同じフレーズを繰り返しながら盛り上げていく手法（いわゆる「ロッシェニ・クレッシェンド」）まで用いられている。なお「イタリア風序曲」というタイトルは、本人がつけたものではなく、友人がそう呼んでいたらしい。同時期に書かれた同じ題名の曲が二つあり、本作はその 2 曲目。